

## 第一の中核概念からの離脱

教会の歴史の中でイエスが蚊帳の外に置かれた経緯

<中央から辺境へ>

\* クリスタムへの転換によりイエスが周縁に追いやられた(教会が中央に進出する見返りにイエスが辺境へ)。

- ・ イエスの描写の変化(良き羊飼いで→近寄りたがたい威厳ある人物像へ)
- ・ 使徒信条の中でもイエスの生涯に触れず。
- ・ クリスタム以前は入信者の細かい信仰育成(カテケシス)と共にイエスの生涯と教えが重視された。
- ・ クリスタム後は信仰の画一性と異端の忌避が強調されるようになって弟子道は影を潜めた。

\* どうして帝国の教会はイエスを周辺に追いやることになったか。——それは紀元4世紀の教会が、社会環境や政治情勢に順応しようとした結果である。

- ・ イエスの教えは、権力を持たない疎外された共同体においてさえ大きなチャレンジだった。→それが一大帝国の支配者側にキリスト教徒が立った時、非現実的で適用不可能な教えと思われた。

敵を愛し(マタ5:44)、明日のことを思い煩うな(マタ6:34)、などを現実に、政治や外交や経済に適用できるのか?

- ・ イエスの生き方、正義に対する熱意、富裕層や権力者(教会が今や、勧誘したい人々)との対立、疎外され虐げられた人への慈しみ、伝統的な社会規範や男女別役割分担を是認しない姿勢。
- ・ 階層性社会の中で、名誉ある地位を占め満足した教会にとって、イエスが教え、実践された逆ピラミッド型の価値観は、悩みの種となった。
- ・ ローマ帝国によって処刑されたイエスを、ローマ帝国のトップに就任させなければならぬ難題 → ユダヤ人をキリスト殺害の張本人に仕立てようとした(ユダヤ人迫害の始まり)
- ・ 十字架が象徴したもの(憎しみに勝った愛、復讐に代わる赦し等)

↓

ローマ帝国の解釈…イエスの生涯と教えを骨抜きにした勝手解釈、「山上の説教」も遂行不能な教えと解釈された。

以上のような巧妙な画策により、イエスの教えが尊重されつつも無視されることとなった。

<礼拝すれども従わず>

- ・ 人性よりも神性を強調して、礼拝して崇めつつ従わない道を選んでいった。
- ・ 十字架の解釈をめぐる衝撃的变化

初代教会（非暴力による犠牲的愛）→ 十字架の意味を軍隊仕様に改ざん。十字架を背負うことは「命を捨てる」ことから「殺す」ことへ。

- ・修道院運動はイエスの教えに立ち返り、イエスに従って生きようとした人々の分離派的運動。
- ・主流派の教会（カトリックもプロテスタントも）はイエス軽視を継続（礼拝すれども従わず）。
- ・マルチン・ルターたちの信仰の中核は「イエスの死」であって「イエスご自身」ではなかった。

彼らは救いに関してはイエスの中心性を叫びつつ、イエスの生涯と教えに従うことに無関心。彼らは、クリスダム世界に迎合し、イエスの生涯と教えを社会問題や経済問題に適用しなかった（権力者の怒りを買うことを恐れた）。← アナバプテストのクリスチャンはこれに抵抗した。

- ・多くの教会でパウロ書簡が優先され、福音書が記述するイエスの生涯が軽視され、イエスによる弟子道への招きが軽視されてきた。

#### <辺境から中心へ>

- ・クリスダム時代の終焉
- ・イエスの生涯と教えに対する関心の高まり
- ・再洗礼派の貢献…イエスが「模範」および「師」であり、さらに「私たちの信仰と生活様式において中核となるお方」であることを探ってきた 500 年間にわたる考察。

#### <イエスに従うこと>…再洗礼派の中心主題

- ・再洗礼派は行いによって救われると言っているのではない。ただし、行ないのない、実を結ばない信仰には大いに疑義を呈している。再洗礼派の人々の生き方は、論敵であった人たちにさえ驚きを与えた。再洗礼派は神の聖霊を受けているようだ。（反対者にとって、異端だと決めつけていた再洗礼派の人々に聖霊が与えられるなどとは考えられなかったのだ）
- ・再洗礼派にとって、聖霊の働きこそ「新生」をもたらし、イエスを信じる者をつくり変えて下さる神の恵みだった。
- ・イエスは従うべき方、そしていのちの源。キリストを知ること＝キリストに従うこと。
- ・イエスの物語を語る大切さ。
- ・繋がること（belonging）、信じること（believing）、生き方が変わる（behaving）の関連（P.63 参照）
- ・クリスチャン → 「イエスに従う者」
- ・「イエスに従うこと」に献身する教会の気風——従う、学ぶ、変わる、成長する、前進する。

- ・重要な問い——イエスは（実際に）何をなさったのか、何を語られたのか、どのようにあられたか。→ 福音書に立ち返り、キリストの模範から学ぶための重要な問い。

## 第二の中核概念 イエスは神の啓示の焦点

聖書が一般庶民に普及し始めた頃、再洗礼派運動が始動。

- ・再洗礼派の聖書解釈の特徴
  - ① 神学教育を受けず、公的機関の認定がなくても、聖霊の声に耳を傾ける人であれば、一般信徒でも信頼に足る聖書解釈ができると確信。
  - ② 聖書が解釈されるべき場…会衆が集う場。聖書を理解するのは共同体の営み。
  - ③ 実践に向けた適用、弟子道を発見することに重点を置いた。
  - ④ 聖書の解釈はイエス・キリストの生涯、教え、死と復活に照らしてなされることを重視。イエスは聖書の中心であり、旧新約聖書がともに指し示すお方。

以上の方法は、斬新な聖書解釈の道を拓いたと同時に弱点も包含している。

### <弟子道への波及効果>

聖書を読むにあたって、理解したことを即実践するのでなければ聖書理解に進歩がないと考えた。聖書の教えだと確信したことを、実際の行動に移し、その行動の結果が聖書を理解したかどうかのチェック機能を果たした。

### <信仰共同体>

聖霊の導きによる聖書の解釈共同体。会衆の「見極め」に委ねることのない個人的解釈の危険を警戒。聖書理解を実践した結果を吟味する主たる場。

\*信仰共同体の役割が衰退する要因…「専門家による解釈への過度の依存」「無責任な個人の解釈」「説教者や教師に対する盲目的な追従」

### <イエス中心の解釈>

聖書解釈における徹底したキリスト中心主義。イエスは「神の啓示の焦点」  
イエス中心の方法で聖書に取り組むこととそうでない場合、異なった聖書理解を導き出す。→ その結果は、非暴力、真実を語ること、経済、権力、男女問題、宣教、教会の本質に影響を及ぼす。

### 追記

イエスが中心なのは当たり前と思っていたクリスチャンが、実は、信仰の大事な部分がクリスダムによって悪影響を受けていたことを知り、福音書に立ち返ることを決心させ、イエスの声に耳を傾け、イエスを礼拝し、イエスに従うことを受け入れている。